

## ソビエトにおける敦煌研究文献三種

——メンシコフ (Л. Н. Меньшиков) 氏の近作——

金 岡 照 光

一九一四年のオルデンベルク (С. Ф. Ольденбург) による、ロシア・トルキスタン学術探検隊 (Русской Туркестанской экспедиции) がもたらした敦煌、トルファンの諸文書については、本邦では従来まとまつた形で紹介、覆刻されたものは、きわめて少なかった。矢吹慶輝博士が「鳴沙余韻」「露都パテログラードに於ける古経跋及び疏讚類」(宗教界二二ノ五・一九一七) 等において断片的に紹介されたことはあつたが、それも、スタイン・ペリオ文書の紹介覆刻にくらべれば、きわめて微々たるものであつた。就中戦後における敦煌文書の各国間に於ける公開交流は、飛躍的に増大し、特にスタイン文書の影印の全面的公開と、チャイルズ (L. Giles) 博士の "Descriptive Catalogue of Chinese Manuscripts from Tung-huang in British Museum" (1957) の刊行は、スタ

イン将来の敦煌資料の全貌を明らかにする上に、きわめて大きな業績であつた。ペリオ文書についてはまだその全面的な整理と公刊は行われていないが、ドミヴィエル教授 (P. Demiéville) を中心とする各種の訳解、資料紹介 (拙稿「敦煌変文研究の動向」(2) — 「東洋学報」四六巻四号 — 参照) はすでに公刊されているし、その影印の一部は東洋文庫にもたらされている。北京文書についても「敦煌遺書総目索引」(商務印書館、一九六二年) が刊行されてから、その内容はかなり窺知し易くなつたということが出来よう。

このような、スタイン・ペリオ・北京文書の紹介に比し、オルデンベルグ文書の紹介は、はなはだち遅れている感があつた。元来ソビエト、東欧における敦煌文書の紹介、研究は、日・華・英・仏等のそれに比し、必ずしも、十分に行われているとはいひ難く、又本邦において可見の機会は、比較的少いものであつた。勿論東欧においても、この種の作業は従来も進められており、ハルドリチョヴァ女史 (V. Hrdličkova) の近作 "Some questions connected with Tun-huang Pien-wen" (Ar. Or. 30, 1963) 等を見るべき労作である。(前掲拙稿参照) しかしながらこれらもやはり、スタイン・ペリオ・北京文書にもとづく研究であつて、オルデンベルグ文書についての紹介はない。ソビエトにおいてもボリス・リフチン (B. Лифтин) 氏の "Сказание о великой стене

и проблемы жанра в китайском фольклоре" (1961) の如く、孟姜女伝説に関するはなはだ詳細な専刊があり、敦煌文書にも触れているが、敦煌写本を中心とする研究ではないので、これ又オルデンベルグ文書の全貌については、十分にこれを知ることが出来なかつた。

ところが最近本邦の研究者で彼地を訪れる者も多く、たとえば中央大学嶋崎教授、京都大学藤枝教授等相ついで、オルデンベルグ文書を閲覧され、その実態は次第に明確にされて行きつつある。丁度こうした事態と期を同じくして、ソビエトにおいて、オルデンベルグ文書を中心とする、重要な労作が相ついで公開され、従来その全貌を知り得なかつた此の種の文書の実態が、やや明らかにされるに至つた。これはロンドン、パリ、北京の文書を中心としていた敦煌研究に、更に新しい局面を展開せしめるもので、本邦における今後の研究に対しても、裨益する所甚大であらうと思われる。よつて、ここにその近作三種につき一読した結果を、きわめて概括的に紹介したいと思う。もとよりその全き評価は、更に綿密な検討と、今後の続刊に俟たなければならぬので、ここでは全くの内容の紹介のみにとどまり、書評とよべるような性質のものではない。その点予め識者諸賢の寛恕をお願いしておかなければならない。

さて、その三種の業績とは、一つの資料目録と、二つの資

料公開、紹介、訳註であり、左の通りである。

- (1) Д. Н. Меньшиков: Описание Китайских рукописей Дунхуанского фонда института народов азии, 744ps, 1963, Москва.
  - (2) Д. Н. Меньшиков: Библьон о Вэймочэе, библьон (десять благих знаменей) 本文 195 ps. 写真 35 ps., 1963, Москва.
  - (3) Д. Н. Меньшиков: Китайские рукописи из Дунхуана, пакатники буддийской литературы сувеньюса 本文 22 ps. 写真 48 ps., 1963, Москва.
- いずれもメンシコフ(Д. Н. Меньшиков)氏を中心として編せられたもので、オルデンベルグ文書を資料としている。これらの資料は、ソビエト科学アカデミー・アジア民族研究所(института народов азии, академия наук ссср)に所蔵せられてゐるものである。以下この三種の研究文献につき、簡単に内容を紹介したいと思う。

# 一

Д. Н. Меньшиков "Описание Китайских рукописей Дунхуанского фонда института народов азии 1963, Москва  
「アジア民族研究所所蔵中国敦煌写本文献目録」 744 ps.

(выпуск 1)

先ず、右の目録についてその大要を紹介してみる。本書はアジア民族研究所所蔵の敦煌西域文書の目録であるが、これは第一輯であつて、その全貌は以下の二輯以後の続刊を俟たなければ、知ることは出来ない。しかしながら、ここに挙げられただけでも、従来うかがうことの出来なかつた、オルデンベルグ文書の実態の一端を知り得る。

収録文献は一七〇〇種余にのぼるが、その過半数は仏教文献がしめられている。以下その内容を列挙してみる。

- (1) 仏教文献 No. 1~No. 1415
- (2) 儒教・道教文献 No. 1416~No. 1441
- (3) 歴史・法律文献 No. 1442~No. 1445
- (4) 文学文献 No. 1446~No. 1513
- (5) 墓誌銘・碑文等 No. 1514~No. 1515
- (6) 辞書・字書・韻書 No. 1516~No. 1530
- (7) 絵画・一般芸術 No. 1531~No. 1534
- (8) 医学・曆法・天文 No. 1535~No. 1544
- (9) 占術・筮法 No. 1545~No. 1549
- (10) 書法 No. 1550~No. 1559
- (11) 一般記録文書 No. 1560~No. 1707

ここに収められた一七〇〇余種の収録写本は、ジャイルズ目録の八一〇〇余種に比し、かなり少ないものといわなければならぬ。もつともこれが第一輯であるから、以下の刊行を俟た

なければ、一万点と伝えられる敦煌写本の全面的な所蔵状況について、云々することは出来ないが、ここにあらわれた限りにおいては、まだ一少部分という感じは否み得ない。特に宗教文献に比し、記録文書、文学文献のいちじるしく少ないことが目立つ。これは他の機関の敦煌文献にも共通して見える現象だが、オルデンベルグ文書も、その内容が仏教文献に比重がかつていふことと、非仏教文献がまだ十分整理されていないためともおもわれる。

仏教文献について、一瞥しよう。「中阿含経」「増一阿含経」「大方便仏報恩経」「前世三転経」「仏本行集経」「賢愚経」「般若波羅蜜多経」「仁王般若波羅蜜多経」「妙法蓮華経」「大方広仏華嚴経」「大方広入如来智徳不思議経」「最勝問菩薩十住除垢断結経」「大宝積経」「大乘方便経」「無量寿経」「大般涅槃経」「地藏菩薩本願経」「薬師琉璃光如来如来本願功德経」「仏説弥勒大成仏経」「維摩詰経」「月上女経」「思益梵天所問経」「天請問経」「修行道地経」「観仏三昧海経」「菩薩瓔珞経」「金光明経」「金光明経最勝王経」「入楞伽経」「仏説諸福田経」「仏説孟蘭盆経」「仏説雜宝藏経」「無常経」「大日経」「楞嚴経」「仏頂尊勝陀羅尼経」「仏説摩利支天経」「灌頂経」「六門陀羅尼経」「大吉祥陀羅尼経」等の経藏、「摩訶僧祇律」「十誦律」「四分律」「度沙弥尼文」「式叉摩那受大戒法」「受大戒法」「梵網經盧舍那仏説菩薩心地法門戒品」等

の律蔵、「大智度論」「瑜伽師地論」「菩薩地持經」「大乘五蘊論」「金剛般若經贊述」「法門名義集」等の論蔵の写本が収録されている。記載の形式は、先ず經典名をあげ、訳經者の名をあげ、「大正新修大藏經」の巻数、南条文雄博士“A catalogue of the Chinese translations of the Buddhist Tripitaka, Oxford. 1883”のナムバー、藤井博士の“Catalogue of All Buddhist books, contained in the pitaka collection in Japan and China, Kyoto, 1898”のナムバー、ジャイルズ (L. Giles) 目録及び陳垣「敦煌劫余錄」(北平、一九三二)のナムバーをあげ、対照に便ならしめている。以下その經典の写本につき、それぞれに、ナムバーを附し、写本の巻数、形態、行数、内容のコメント、冒頭、末尾の文等を記してある点、ジャイルズ目録記載の形式とほぼ同様である。これらの写本がスタイン本及びペリオ本と如何なる点で一致し、またことなるか、その詳細な關係は現在の所明らかでない。

非仏教文獻についても、その記載の形式は同じであるが、スタイン本、ペリオ本の異本としても、照合すべき重要な写本がかなり豊富に収められているようである。たとえば「文学類」について見れば、「吳都賦」(擬)「文選」(擬)「武王家訓」(擬)「王梵志詩一百十一首」「大子成道變文」(擬)「孔子項託相問書」(擬)「舜子變」(擬)「晏子賦」(擬)「鶯

子賦」(擬)等は、それぞれS本、P本と校合すべき重要な資料である。S、P両本にはない新しいテキストとしては「仏報恩經講經文」(擬)「大乘八閼齋戒文」等があり、又維摩經關係の講經テキストとして、「十吉祥」「維摩碎金」等があり、「維摩詰所說經講經文」(325)も、従来公刊のものとは別の維摩經講經文として、一見の必要がある。

他の記録、天文、史書、曆法、医書の類については、詳述する紙幅もなく、又他に多くの識者もおられることと思うので省略する。いずれにせよ、本目録はオルデンベルグ文書の一半を紹介したものであるし、その内容も詳しいことは、マイクロフィルムによる全文書の公開、あるいは影印による資料公開をまたなければわからない。しかしながら、ここに紹介されたものに限定しても、スタイン本、ペリオ本と照合することによつて、新しい問題を提起しようと思われるものや、更にジャイルズ目録、「敦煌遺書總目索引」にも記載のない新資料を見出し得るのであつて、今後の敦煌文書に更に新しい分野を開拓するにちがいないと思われる。今後、多くの分野の研究者により、精密な検討を加えることと、オルデンベルグ文書の影印が速やかに公開交換の運びに至ることを期待したい。

Д. Н. Меньшиков: «Взгляды о Вайночце, Ганьвань <десять  
благих знаменей>». Москва, 1963. 本文 195 ps, 影印  
35 ps.

「維摩詰經變文、維摩碎金、十吉祥」(東方古代文獻叢書、  
第八種、東方出版社)

本書は、前書と同じくメンシコフ氏の編訳注になるもの  
で、アジア民族研究所所蔵の資料の三種を、写真によつて公  
刊し、これに訳注と解説を付したものである。前掲目録によ  
れば、この三種の資料とは、

No. 1472 「十吉祥」(B-223)

No. 1473 「維摩碎金一卷」(B-101)

No. 1474 「維摩詰所説經講經文」(擬)(B-232)

である。右目録によれば、「十吉祥」は、文殊師利菩薩の誕  
生に伴う、十の吉兆の歌謡物語り、すなわち講唱文であつ  
て、一行十五字乃至十九字よりなる、九四行の韻文散文混合  
文である。「維摩碎金一卷」は、「維摩詰所説經講經文」の一  
部であるが、「敦煌變文集」においては未収録で、このタイ  
トルのテキストは、まだ登録されていない。尾題までふくめ  
て二七五行、一行十八字乃至二十二字から成るかなり長篇の  
講唱文である。維摩詰所説經、仏國品第一に関するもので、

末尾に、「靈州龍興寺講經沙門匡胤記、被原宗型来允汨累日  
写尽、文書縁是僧家不欲奉阻、朔方积家(?)派(?)、」なる奥書  
を残す。「維摩詰所説經講經文」も同じく、従来未発表のテ  
キストである。本写本も又前掲写本同様、「敦煌變文集」に  
は収められていないが、本写本は「敦煌變文集」第五卷の  
「維摩詰經講經文」(擬)(B-232)(變文集下卷五九二一六  
一九頁)と連絡がある。すなわち「維摩詰問疾」の故事であ  
つて、長者子善徳が問疾するくだりよりはじまり、ペリオ本  
の弥勒問疾、光嚴童子問疾と連絡するものである。(弟子品  
第四)本写本は標題は欠けている所から見ても、前掲ペリオ  
本の後段がはなれて、残存したものではないかと思われる  
が、一行十五—二十字内外、全篇一八〇行をもつておわる。

以上の三種のテキストについて、原典はそれぞれ写真を挙  
げ、メンシコフ氏の手になる訳文および注解を付し、附録と  
してこれらの写本の異体字正字対照表を収め、更に巻頭には  
「變文の形態とその起源」「維摩詰に関する變文」「十吉祥」  
なる解説を附している。原典を写真をもつて示したことは、  
次節でのべる「敦煌讀文」においても同様であるが、従来の  
「敦煌變文集」をはじめとする活字覆刻に比し、いちじるし  
く学術的信頼度をたかめるとともに、写本の形態、字体その  
他についても、一目瞭然たらしめた上からも、はなはだ裨益

する所が大きい。「敦煌變文集」の如き高い水準を有する覆刻本においてすら、なおかつ多くのミスが見出される点にのみ、今後の敦煌写本の公刊は、かかる写真覆刻の形態をとることが最も妥当ではないかと思われる。本書に収められた写真は、十全とは称し得られないが、まずまず利用に堪える鮮明度を有している。

次に訳文について一言する。訳文はそれぞれ原典写真と対応する行数を附し、おおむね逐語的な訳により、語学的な正確度を期しているようである。特に訳解上、一語によつては定着しにくいテクニカル・タームズは、そのまま、原音表記とし、「」でおぎなうか、*комментарии* で詳細な解説を附している等、はなはだ用心深い方法をとつている点は、信頼出来る。たとえば

шан са ний.

『в мире мучений』— в мире Sono страдание жмет  
[нас] отнем. (Ф-101. p. 70.)

の、шан са ний「上下吟」や、Sono「娑婆」の如きはそれである。訳解の正確度については、まだここに十分論じ得るだけの準備が不足しているので、詳しくは述べない。いずれ原写真と十分に對比して、その細部を論じなければならぬと思う。ただ一読した結果次のことだけは高く評価出来ると思う。第一には、原写本を底本としているため、ウエレー(A.

Weley) 氏の "Ballads and Stories from Tun-huang" に見られるような、覆刻定本（すなわちウエレー氏の場合は「敦煌變文集」）のミスが、そのまま訳文のミスとなるケースがないこと。第二は、前述の如く、かなり丹念な逐語訳によつてゐるため、ウエレー氏の如く、文学的に香気ある訳文とはいえないかもしれぬが、純然たる誤訳（これは一瞥した範圍でも、二、三目に触れたが、敦煌写本の翻訳上、現段階では不可避のことであろう。）以外には、曖昧な箇所が比較的小さいことである。敦煌写本の訳解はなおかかる語学的翻訳の蓄積が必要と思われる。

次に *комментарии* について見てみると、Ф-101. 中 252. 中 253. の三写本につき、それぞれ一六六、八九、六七の項目にのぼる註解を附している。それらは主として、仏語、固有名詞の解説が多く、本邦の研究者、特に仏教関係の研究者にとつては、常識となつてゐる語も少くない。「沙婆界」「三途」「輪廻」「釈迦」「衆生」「菩薩」「世尊」「四諦」「六道」「供養」「禪定」「沙門」「婆羅門」「外道」「羅漢」「文殊師利」「閻浮」等々の注も、その説くところは、織田・望月の「仏教辞典」の解説以上のものと思われない。中国研究者にとつても、既知のもの、常識化している注がかなり多く、「西施」「襄王」「落安」「韓信」「樊噲」「楚玉（和氏之璧）」等の注解も必ずしも珍らしいものではない。要するに本書の注は

もつばらこうした仏語、固有名詞に関する解説が多く、語彙、語法、文体、構成等、講唱文にとつて、重要な問題をはらむものについては、きわめて僅かしか触れていない点が、やや物足りない。またその僅かの部分に関する注解にしても、必ずしも新説が開陳されているわけではない。たとえば「上下吟」の注（一三九頁）にしても、講經文の韻文体を分類して、律に近い八句韻文と、結句に經文の詞を引きおこす長文のものとに分け、上下吟のとき、上章は不韻で、下章が「唱將來」の来と通韻するものというように考証しているが、これは孫楷第氏「俗講、説話与白話小説」の説を援引したものであり、「断」（一四三頁）「唱將來」（一五四頁）等の語に関する注も孫氏の説の踏襲であつて、特に新しい見解ではない。以上このコメンタリーは、講經文、變文の文体、語法その他の面では、まだまだ十分なものとはいひ難く、とりあげられた項目も、前述の如く、仏教關係の術語が大部分を占め、その限りにおいては、かなり親切なものであるが、變文、講經文の本体を知ろうとする者の疑問や、唐五代の語彙、語法を知ろうと要求する者にとつては、やや不十分な点があることは否定出来ない。もつともそうしたことは本文の解説中で示したというのかも知れないが、單に翻訳するだけでなく、十分の解説を必要とするものも多い。これらは今後に期待したい。

次に順序は逆になるが、総説を見ると、「變文の形態とその起源」「維摩詰に関する變文」「十吉祥」の三章を主とし、最後に覆刻翻訳に関するあとがきを附している。「變文の形態とその起源」において、メンシコフ氏は、多くの根本資料と、主として中国における研究成果を駆使して、充実した論を展開している。その論ずる所は、先ず變文原典の解説と、従来の研究者、主として中国の学者たちのなした業績の評価にはじまり、ついで經典の翻訳を経て、仏經が次第に説經、転説という講唱の形態に入つて行くことを、「高僧伝」「統高僧伝」「宋高僧伝」等の根本資料にもとづいて考証し、こうした転經、唱經が敦煌出土の講經文に流れていくことを述べている。更に變文の文体や、音律上の細部について論じ、「變相」との關係につき論及している。ここに論ぜられたことも必ずしも前人未発の論考のみではなく、とくにその源流と転變に関しては、向達・王文才等の中国の學者の論考が多く利用されているし、又メンシコフ氏は引いていないが、本邦でも道端良秀教授の「唐代仏教史の研究」等に、同様の趣旨のことが詳細に説かれている。しかしながら、變文の文体、音律等につき、駢体文との關係を論じ、經典転説上の音律に関して考証した点等は、その当否は、更に今後の検討を要するが、尚一家言たるを失はない。メンシコフ氏は中国における論考はきわめて博くあたつておられ、その該博な智識には

敬佩するが、本邦における研究成果（前掲道端教授の書の如き）が殆ど利用されていないのは、あるいは彼地においては入手可見の手段がないためであらう。今後一考を要する問題であらう。第二、第三の章は、本書に収録した「維摩詰経講經文」「維摩碎金」「十吉祥」に関する詳細な解題であつて、本邦未見の資料であるため、裨益する所が大きい。

本書は附録として、収録三種の写本の誤記、異体字、譌字、音通字の一覧を附しているが、はなはだ役に立つものであり、今後の覆刻諸本にも、この種のこころみが望ましい。

#### 四

Л. Н. Меньшиков: "Китайские рукописи из Луньхуана, памятники буддийкой литературы суэвского" Москва, 1963

「影印敦煌讀文 附宣講」（ソビエット、アカデミー、アジア民族研究所、東方古代文献叢書第十五種、東方出版社刊）解説 22ps. 写真 48 ps.

本書もメンシコフ氏の編になるものだが、前掲書と同じく、原典を写真をもつて示し、「讀」という様式の作品」「説教と宣講」なる二文を序説として附している。

ここに収録された「讀」「宣講」という仏教唱文は次の十四種のテキストである。

- (1) 金剛經讀一本 (DX-296)  
 <No. 1370> (ナムバーは前掲目錄所収ナムバー)
- (2) 十空讀・五台山讀一本 (DX-1358)  
 <No. 1372>
- (3) 十空讀(擬) (DX-992)  
 <No. 1371>
- (4) 太子讀 (DX-1230 a)  
 <No. 1373>
- (5) 五台山讀文 (DX-1009)  
 <No. 1362>
- (6) 淨土法身讀  
 往生極樂讀  
 宝鳥讀
- 蘭若空讀 (Zr DX-883)  
 (No. 1361)
- (7) 淨土法身讀 (DX-1047)  
 <No. 1376>
- (8) 毘出家讀 (DX-109)  
 <No. 1365>
- (9) 金剛五札  
 涅槃讀  
 出家讀 (以上 Φ-176)



- (9) <No. 1364>  
 南宋讀一本 (Φ-171)  
 <No. 1363>  
 (10) 四菩薩祈願文<擬> (JX-144)  
 <No. 1381>  
 (11) 入山讀文  
 伍台山讀文  
 <無題小文三種>  
 長安詞 (以上 JX-278 a)  
 <No. 1369>  
 (12) 押座文及び大乘八閼齋戒文 (Φ-109)  
 <No. 1471>  
 (13) 八種範重犯墮文 (Φ-221b)  
 <No. 1265>  
 (14)
- 以上の十四種のテクスト、その中に一写本内に数種の讀文が記録されているものもあるので、その数は更に多くなるが、それらの写真を附するとともに、解説をかがげ、讀という形式の概略を論じたものである。ここでは資料の公刊が中心を占め、訳注は附されていない。
- 以上の十四種の写本は、すべてアジア民族研究所所蔵のものであるが、その中には、学会未公開のものもあるし、又スタイン文書と通ずるものもある。たとえば「金剛經讀一本」

(JX-296) は僅々二十行（一行は七言四句）の八〇句の讀文で、上部やや欠損し、分明を欠く点はあるが、首題・尾題ともに存する、従来学会に未発表の貴重な資料である。その他「四菩薩祈願文」(JX-144)「押座文・大乘八閼齋戒文」(Φ-109)「八種範重犯墮(文)」(Φ-221)の諸写本はジャイルズ目録にも載録されていない、新しいテクストである。それに対し、「十空讀」(JX-992)は[s. 4039] (Giles 6186③)と「淨土法身讀」(JX-1047)は[s. 382] (Giles 6103)の「大乘淨土讀一本」(塚本善隆氏「唐中期の淨土教に触れてみる」と「五台山讀文」(JX-1009)は[s. 370] [s. 4039.2] [s. 5573] (Giles 6112③, 6186③, 6197③)と「太子讀」(JX-1230 a)は[s. 2204] [Giles 7179.2]と「見出家讀」(JX-109)は[s. 5539] (Giles 6154③)の「出家讀本」と「出家讀」(Φ-176)は同じく[s. 5539]の「出家讀本」と「南宗讀」(Φ-176)は[s. 4173] (Giles 6184)及び「敦煌撥瑣」三十八と、「入山讀文」(JX-278)は[s. 1497] (Giles 6174③)の「樂入山讀」及び[s. 19]「好住娘」と「伍台山讀」(JX-278)は[s. 370] (Giles 6112③)と[s. 4039] (Giles 6186③) [s. 5573] (Giles 6197③)等とそれぞれ通ずるものである。又この中「南宗讀」は、任「北「敦煌曲校録」所収(一二三頁)の[Φ-2963]及び前出「敦煌撥瑣」本の再録と通じ、細かい字句の異同数ヶ処をのぞけば、ほぼ一致する

し、「入山讃文」(IX-278③)は、同く「敦煌曲校録」所収(九八頁)の「好住娘」(p. 2713) (s. 19)「敦煌雜録」本の末尾の部分と一致する。こゝろみに本書影印と、「敦煌曲校録本」を対比すれば左の通りである。(八〇〇の中は「敦煌曲校録」本。オルデンベルグ本、「敦煌曲校録」本ともに、記載なき字は×で示す。)

「好住娘。且須師僧×△同△戒伴。好住娘。舍△捨△却金盤△瓶△銀△葉△蓼。好住娘。且△△須△鉢△盂△黃△杖△青△錫△杖△。好住娘。××△捨△却△曹△槽△頭△龍△馬△△羣△。好住娘。且須虎狼獅子×。△聲××××。△好住娘△。舍△捨△却△治△髭△錦△振×△面△。好住×△娘△。且順亂草×△以△一束。好住娘。仏道不遠廻心至。好住△△娘△。今△全△身努力寛△△因△縁看△×△好住娘。」

オルデンベルグ本は、ペリオ本、スタイン本、敦煌掇瑣本の「好住娘(辞娘讚説言)」と対比すれば、その末尾九〇字前後に当るにすぎないが、この両本は明らかに同系の写本であることが判明する。こうしたオルデンベルグ本との対比により、スタイン、ペリオ本、ベキン本もそれぞれ重要な添加を必要とされて来るにちがいない。

「金剛經讀一本」(IX-296)「四菩薩祈願文」(擬)(IX-144)「押座文・大乘八閻齋文」(中109)「八種龜重犯墮文」(中221)は前述の如くジャイルズ目録にも記載のない写本

であるが、この中メンシコフ氏は、(中109)(中221)文書を讚文と区別して講唱宣教の文として扱っている。「金剛經讀一本」についてはすでにふれたが、一行七言四句、二〇行からなる讚文であつて、首題、尾題をそなえ、上部の些少の欠損をのぞけば、ほぼ完整しているものである。

「四菩薩祈願文」は僅々十一行の小片である。元來四菩薩とは胎藏界曼荼羅における普賢、文殊、觀自在、弥勒の四菩薩をいうことは衆知の通りであるが、ここに記録されているのは普賢・文殊の二菩薩の名号である。

「無始時來難得值、 我今各発志誠心、  
願見慈尊親頂礼、 念普賢菩薩摩訶薩四遍。」

身福蔽智黄金相、 堪為衆生為依杖、  
我今各発志誠心、 願見慈尊親供養、

念文殊菩薩詞薩四遍。」

右の如く、普賢・文殊、両菩薩の称名をすすめたるのち、「勸化一切衆生念此四偈文、並四菩薩名号。」とあるを見れば、このフラグメントの前に觀自在菩薩、弥勒菩薩の称名をすすめる二つの偈文があつたものと思われる。

「押座文及び大乘八閻齋文」の、押座文は七言三十六句首尾一貫せるものであるが、押座文とのみ記し、特別の名称を附していない。首題の下に「作梵而唱」と注記し、「善哉大聖大慈尊、三世十方无数仏、各願乘花無宝座…」にはじま

り、「…能者合掌虎（虔）者恭（恭着）、經題名字唱將來。」なるセツト・フレーズをもつておわり、その後に「念觀世音菩薩三說 此下受齋戒」なる文がつづき、「八關齋戒文」がつづく。この押座文は従来公開されたスタイン本、ベリオ本の押座文とは別のものであり、筆者は曾て、現存押座文を九種として、（疑はしきものはのぞき）それぞれの異本について、論及したことがあつたが（拙稿「押座考」東洋大学文学部紀要第十八集、一九六四、一〇）、今ここにこのオルデンベルグ本を一種加えなければならない。ただ、このオルデンベルグ本も、前掲九種の押座文と異質のものではなく、冒頭に「作梵而唱」の注記を有すること、「唱將來」をもつて収場し、經文に連絡すること等、その文体、機能は前掲拙稿で論じたことを、更に確証してくれるものと思われる。又このオルデンベルグ本押座文の語句も、スタイン本ベリオ本と一致する点多く、押座文の流用性を示している。こころみにオルデンベルグ本押座文の十行以下を「維摩經押座文」(s. 240) (s. 1441) (p. 3210) (p. 2122) の末段と対比してみよう。

押座文 (p. 109)

維摩經押座文

今晨擬說甚深文  
惟願慈悲來至此  
聽衆聞經置消滅  
惣証菩提法報身

今晨擬說甚深文  
惟願慈悲來至此  
聽衆聞經罪消滅  
總証菩提法寶身

火宅忙忙何日休  
五欲終朝生死苦  
不似聽經求解脫  
學仏修行能不能  
能者合掌虎（虔）者恭（恭着）

火宅茫茫何日休  
五欲終朝生死苦  
不似聽經求解脫  
學仏修行能不能  
能者恭虔合掌着

經題名字唱將來

經提（題）名目唱將來

以上を見ても、この両者が共通する機能と慣用句を以て、相互に通用しうるものであることは明らかであろう。これは「經摩經押座文」にとどまらず、他の押座文とも共通するものである。（前掲拙稿参照）

メンシヨフ氏は本書の解説において、押座の語義その他を、主として孫楷第氏の論にもとずき、考証しているが、押座と對極的な位置にあるものと仮定される解座文の存在——解座文は単行の写本は現存しないので仮定にとどまるが——についても、孫氏の仮説（孫楷第「俗講、説話与白話小説」九二—九三頁）にもとずき、論じている。（本書二六頁）これは今後更に經典の注疏その他と併せ、更に展開していかなければならない問題であらう。

「大乘八關齋戒文」は、右押座文につづき、第十五行目に「八關齋戒文」と記し、その下に「於八關齋戒經略出」と注し、二一八行に及ぶ長文のものであり、最後の一行に「大乘八關齋戒文一卷」と尾題を附している。すなわち、これは

「八閼齋經」(大正新修大藏經第一卷 No. 89) にもとずける勧化の文で、首尾一貫せる從來未公開の写本である。本戒文の末尾には、前掲尾題につづき、

「一願衆生普修道、二願一切莫生疑、三願袈裟來掛身」にはじまり、「十三願衆生勸念仏、十四願惣向仏前來、十五願西方生淨土。」という十五発願の文がつづき、「更莫闍浮(前掲『Описание Китайских рукописей』は、五八〇頁、第一四七に本写本の解題を収めているが、この「浮」字を「淨」字に誤記)從(徒)受胎、借問家郷何處在、極樂池邊座台」の偈文をもつて終結する。

最後に収録された「八種龜重犯墮」は、冒頭に「八種龜重犯墮、馬鳴菩薩造」と記し、

「最上尊師於花足、以真衷心而頂礼、

諸本統中所宣説、龜重犯墮略演説。」

の七言四句の偈をもつてはじまる。そして、この宣講は第一頌より第八頌に至る七二行に及び、「若有人犯此龜重、須是集輪中作懺悔、対本尊面前名白懺悔、方可滅罪了華。」をもつておわり、所謂「龜重縛」の戒文を簡略に説いたものである。そして、些かの行間をあけ、七三行目からは「常所作儀軌八種不共吉祥形魯剛造」と題し、「八種不共根一本了」をもつておわる二二行の文がつづき、更にその後に闕題で「大乘秘密、起發諸仏説、并(菩薩)説、因一切法…」にはじま

り「羅門將入藏、付属馬鳴有得大成就、馬鳴之像光在別処」におわる六九行の長文がつづく。そして最後に「口善人慳業已深、」にはじまる七言の偈がつづくが、闕損が多く、判読がむずかしい。最末尾に馬鳴像らしき図像があるが、抹消されている。

以上、「八種龜重犯墮」「常所作儀軌八種不共」及び「馬鳴菩薩文」(擬)の三部にわかれる宣講文が、(4b-221)文書の構造である。

以上十四種のテクストは、所謂「讀」と「宣講文」とにわかれるが、メンシコフ氏はその解説において、孫楷第、鄭振鐸らの説によりつつ、曹植・庾信・王勃・李白ら中国の伝統詩に見られる讀と、仏典の偈とを対応させ、これら敦煌の讀文が占める重要な位置を論じている。更に十二種の讀文と、二種の宣講文につき、詳細な解題をかかげ、解説の資としている。敦煌曲子詞の研究は、王重民、任二北氏らのすぐれた業績の上に、近年入矢義高教授らの綿密な補訂と改筆が加えられ、今後は敦煌文学の研究に更に重要な地歩を占めて行くものと考えられるが、その意味からも、メンシコフ氏ら、ソビエツト敦煌研究陣の公開したこれらのテクストは、更に十分なる検討を加えて、今後の研究に資して行く必要がある。

近刊のソビエト敦煌研究文獻三種につき、卒読した結果を、とりとめなく紹介してみたが、今後、それぞれの分野の諸先学の手による、十分な研究がおこなわれる一端ともなれば幸いである。又今後ソビエト斯学界が、これにつづく業績を公刊することを期待するとともに、オルデンベルグ文書の全面的な公開と、本邦学界への交流を願つてやまない。(一九六五・二・一五)

ハートウエル著

## 中国経済史資料(六一八—一三六八)の手引

草 野 靖

宋会要輯稿とか続資治通鑑長編などの基礎的な文獻はともかく、雑多な筆記・文集の類に就いては、その中にどんな叙述が見えるかを、正確に詳しく予測させる解説書・索引が作られ、これを利用して、もつと容易に能率的に必要な資料を蒐集できるように出来ないものだろうか、などと云う願望は誰れでも抱かれるに違いない。

本書は唐宋金元の間における所謂文集の中から経済問題にかかわりのある記事・文書を選らび出し、その一件一件の表題を掲げると共に、それぞれに手短かな摘要を附けて記事の

内容を示し、また巻末に文書のテーマや原典語彙の索引を併せたもので、上記のような願望を持つ人々にとつては大いに興味をそそられるものである。この種の書誌は、明清に就いては、先に謝国楨氏の「明清筆記談叢」があり嘗て本欄で紹介されたが(本誌第四号)宋代に関するものでは、これが初めてであるので、以下本書の内容を紹介すると共に、若干の私見——この種の書誌を作るに当つて、更に配慮されれば望ましいと思われる事柄——を記すことにする。

尚本書が編纂された目的について序文に記す処を見ると、本書は、一般に経済学や経済史に就いての素養はあるが而して特に中国経済史に就いては不案内な人々の読書としても有意義であると共に、殊に経済発展の問題や経済史・社会史の研究にたづさわる人に近づき難い諸文書を研究素材として提供することの出来る数巻の書物(翻譯資料輯)を作成しようとして準備を進める中に出来上つたもので、一九五九年十月、イリノアのハイランドパークで開かれた会議で、現今のアジア経済史の教授・研究にみられる欠陥が検討された際に提起された企画に従つて組まれたプロジェクトの一成果である云う。そして本書に托する願望・本書が利用されることに依つてもたらされるであろうと思われる成果として、中国に就いての認識を正し、また西欧の歴史において経験された事象のみを以つて構築されている現行の経済発展や経済史の理論